新入生歓迎特別企画

対談『青春を挑発する』

藤沢陽一

男なら一日一ペンぐらいはケンカせにゃいかん

ふじさわ・よういち　一九三五年生　48才
岡山県立西大寺高校卒。高校在学中より演劇活動を開始し、「あかしやの会」「うちうみ」と二つの、いわゆる新劇系の劇団を経て六十年代に自己の劇団「どろんこ」を結成。以後「小さな生命を虐殺するものへの抵抗」を一貫したテーマとして追求しながら「八幡船」「銀仮面団」と活動を続けている。

瀬戸大橋や金属バット殺人事件を題材に、ユニークな演劇活動を続ける劇団「銀仮面団」の藤沢さんと草の根市民センター代表として住民運動や反公害運動を頑張っている谷川さん。この、岡山にこだわり続け、問題提起を続けてこられたお二人に今の若者について語っていただきました。ちょうど僕たちのオヤジの世代なんだけど、その感性と行動力の若々しさはヘタな若者なんかよりよっぽどすごいぞ。

藤沢　谷川さんはお酒はどのくらい。
谷川　相手次第ですね。
藤沢　酒は気分ですな、一人で飲んでもうまくないから。
谷川　うちの、選挙で集まって来る連中はあまり飲まないですね。
藤沢　**最近の若い人はあまり飲まなくなったでしょう。それと目立つのがタバコを吸う人が少なくなったということ。**ことに僕は芝居やっている連中とつき合うせいかもわからんけど。今うちの劇団に出入りしてる男の子なんかぜんぜん吸わんですよ。
谷川　ノドに悪いとか。
藤沢　もともと吸っていないというか、吸いはじめないという感じです。体に害になるようなものは最初からもういらんじゃないか、という感じで。
谷川　でも女の人でタバコ吸うのは増えてきましたね。
藤沢　これはひじょーに嘆かわしいことですな。僕はこれを劇団でゆうて、いつも怒られるんですわ、藤沢さんは男女差別しとるって。差別するつもりはないんだけど、だいたい女の子がタバコ吸ってかわゆうないね。
谷川　自分がタバコ吸ってて似合っとるかどうかわからんけど、女の人がタバコ吸ってると気になるね、吸い方とか手つきとか。
藤沢　僕は全然タバコ吸わんでしょ。だからあの臭いが嫌なんです。そうすると、タバコ吸う女の子ちゅうのは、たとえばキスしてもタバコの臭いがするでしょう。これはものすごく嫌なんですわ。喫煙の習慣のある女の人は、男から見ても肌が荒れているしね。
谷川　最初から吸わんかったり、お酒もムチャ飲みするような習慣がなかったらいいんだろうけど。
藤沢　我々の若い頃はもう這い回るぐらい飲んどりましたな。最近の若い人は節度を保って飲んでいるというか。
谷川　そのかわり豪傑がいなくなったような。
藤沢　まぁ確かにそうですね。だいたい昔は、特に男の子は酒・タバコ・女。とにかくどれもなるべく早いうちに経験しとらんと一人前になれん、というのがあったね。先輩に連れて行かれたら意地を張ってでもとにかく飲んでみせるとか、ウィスキーをコップであおったりして。
谷川　僕は高校一年の時、文芸部でね雑誌ができたお祝いで上級生に焼酎を飲まされてね、一緒になって外を走って死ぬおもいしたことがあるよ（笑）。
藤沢　その辺、どこをもって良しとするか悪しとするかになってくるんだけど、こんな話を今十八才で岡大に入って来る人なんかのやさしいママが聞いたら、もう柳眉逆立てて怒るだろうね。まあ確かに良いことじゃないですわ。でも男が親の手を離れて、恐るべき現実の中に入って行った時の試練みたいなもんで、早い話が先輩に飲めと言われてそこで突っ張ってはねつければ殴られる、飲めば自分がシンドイ目にあう。
谷川　**「我々があの年頃っちゅうのは危険が回りにいっぱいありましたね。誰もそれに対してバリヤー張ってくれなんだゆうわけで。**今はそんなバカげたことをせんで済むようにバリヤー張っててくれている。
藤沢　僕らと一番違うのは危険にさらされずに大きくなってきとるゆう、そんな感じしますなぁ。だから闘うことを知らん男になっている。若い女の子なんかが理想の恋人や夫の条件として第一にやさしい男をあげるでしょう。非常にけっこうなことかも知れんけど。今の日本ならばやさしさで生きて行かれるけど、一つ間違ったらやさしさだけでは生きて行けんようになるでしょう。実際にそうなった時にも理想の恋人や夫でありうるか……
谷川　僕らは戦後にひどく飢えていた時期なんかがあるし、そういう状況がまた来ないとは限らんですね。でも今の危険を知らない、体験していない人たちにどんなに危機意識呼びかけてもわからんね。
藤沢　今のままやって行ったらこんな事になるぞ、というものを僕にしても谷川さんにしてもいろんな形でやってきたんだけど、それが全く絵空事としてしか受け取ってもらえないわけ。結局わからんわけだね。飢えたことも、身に危険の迫ったことも、肉親を不条理な力で奪い去られたこともない、そういう世代。今のままの時代が永遠に続いていくならそりゃそれでもいいかもしれんけど、現実にそういう時代は終わりかけている。もう間もなく終るだろう。そういうものに対する一つのやり切れない歯がゆさ、みたいなものはありますなぁ。
谷川　**運動をやってきた者として言うとね、今の若い人は知識として知りたがるんだよね、**いろいろ言ったうえで納得がいけば自分もやりましょう、みたいな感じで。そういう人はたいてい続かないのね。僕らが動き始めたのは知識を持って、理屈を立てて、それではオレもやらにゃいかん、というのじゃないわけですよ。最初のとっかかりはごくわずかな事しか知らなくて、だけど動き出して。動き出したということはもう自分自身の怒りっていうかね、非常に感情的なものなのね。それがやっているうちにイヤでも知識は増えてくるし。だからまず動こうと。
藤沢　とにかく感覚的・肉体的につかめないわけですね。完全に隔離されたケースの中で育ってきとるゆう感じなんで。実際はものすごい危険の中にいるのにね。僕なんかもずっと瀬戸内海にこだわり続けて、瀬戸大橋にわからず屋と言われながら四面楚歌の中でガンコに抵抗しとるっちゅうのは、結局は知識からではなしに、子供のころからずっと瀬戸内海で育って、海に親しんできたのが、目の前でもう本当にずんずん海が死んで行くのがハッキリ見えてくるとね。これはもう知識じゃないね。知識ではよう分からんでもアイツが悪いんだ、ということは分かるわけ、そうしたらとにかくそいつに意志表示していこうという形になっていく。経済優先で考えたら反対するのがバカに見える、だけども一つ大きい目で、どんなに我々が地球を汚してきたかと、もっとも濃縮されたサンプルがあそこにあるんだ、という目で見たら絶対に許すことはできないよ。
谷川　まぁ瀬戸内海をブチ殺すことの総仕上げみたいなもんですね。
藤沢　四国の人にすれば便利になるんだ、なんて言うけど、あれができればしょうもない観光客がどんどん来て、「青い島・四国」なんてのもアッという間に踏みにじられてしまう。
谷川　失うものは大きいと思いますよ。美しい風土なんてすぐ無くなってしまってね、都会のこすっからいところばかりが侵透していってね。
藤沢　そもそも今の国造り、橋造り、道造り、全てのいわゆる列島改造というのが美しいものをなくすためにやっているわけですね。結局産業を発展させよう、利益を上げていこう、生活を向上させていこう、こういった発想そのものが人間にとって一番大事なものを殺していっているということですな。もっと豊かになろうという発想はもう捨てにゃいかんと思うねぇ。もっと貧しくなろう、もっと不便になろう、もっとボロい車に乗ろうと思っていかんと日本は動いていかんですよ。それがどうやったら今の若い人たちにわかってもらえるのか。結局僕らの世代というのは何もない時代に生きてきたわけで、今は夢みたいな世界ですから。
谷川　ただあぶないのはこう言うと、今の若い者はなっとらん、ガマンができん、辛抱を知らん、だから一ぺん自衛隊にでも放り込んで叩き直してこい（笑）、というのがすぐ出て来るんですわ。それならばまだどんなにだらしなくても、いくら鉄砲を持たせても絶対戦争できんちゅう連中ばかりになってしまう方がいいね。
藤沢　もう鉄砲も持ち上げれんくらい徹底的に軟弱な若者になってくれた方がいいかも知れませんね。ただ僕は、言葉としてはナンセンスな言葉だけど、何作か前の芝居の中で書いた言葉なんだけども、「絶対闘わないために闘う」っていう若者になって欲しいと思いますね。ある意味でやさしさ、とか平和ということは非常に怖い部分があると思うわけ。現状を維持していくためのやさしさ、現状維持すなわち平和であるという一つの考え方ね。今の若者たちはたしかにやさしい。他人にやさしいのは見ていて感じがいいし、つき合って気持ちはいいですね、少々のこともトラブルなしに、どうもどうもと言いながらかわしてくという。ところがそうやってかわしてくうちに何かものすごく怖いものもどうもどうもで通していっているようなわけね。そうなってくるとやさしさっていうのはある意味では一番怖いものかも知れない。
谷川　世の中にはトラブル・メーカーとゆうのがいてね、どんな事であっても何か一言申し立てて、こぜり合いを起こして皆んなに嫌われる人が。アイツがおらなんだら物事がすんなり決まっていくのに、ゆう人が必ずいる

谷川正彦

やさしさと裏腹に怒りってものがなきゃ

たにがわ・まさひこ　一九三四年生　48才
岡山県立操山高校卒。藤沢氏との出会いは高校卒業後、同じ劇団「あかしやの会」に参加したのが最初。六十年代後半、岡山水俣告発の結成に参加したのをきっかけに社会問題、反公害運動に取り組む。森永告発、岡山救援センター、岡山住民運動連絡会そして岡山草の根市民センターの代表として日夜奪闘している。

わけ。長い目で見たら、その人がおるおかげでそのグループはいつも軌道修正をされている。そんな人がこの頃いなくなってきてるような気がするね。

藤沢　自分の回りの空気がよどみなく流れて、平和な時間が流れてケンカせず、やさしゅうやっていく、という間に何かものすごい怖いものがどんどん通っていってしまうという感じで。その結果が今の平和というやつじゃないかという気がするわ。だから僕は少くとも**男の子ならば一日に二ぺんぐらいはケンカせにゃいかんと思うね。**ことに今のような時代に生きとったら、何もかもどうもどうもで通していったらこれは大きな犯罪じゃないかと。ずっとケンカを売ってきたのが谷川さんなんだろうけど（笑）。

谷川　僕は男がそんなにやさしゅうなくてもいいと思ってるんだけどね。頭のてっぺんからツマ先までやさしい男なんてのはねぇどうも。それにやさしさと裏腹に怒りってものがなきゃいかんと思うわけです。みんな肉体的な直接的な痛みじゃないんだけど、毎日やられているのに、きのうに続いてきょうがあり、明日もこんなもんだろうゆうところでね、済ましていってるんじゃないかね、若い世代は。

藤沢　僕もね、おととし黄金バット三部作ゆうのを上演してね。直接的には例の金属バット事件なわけ。今度の作品にもあるんだけど、オヤジの世代がいつ寝てる上で子供に金属バット振り上げられても仕方がないと思うん。というのはね、誰か一人大変な責任を逃げたヤツがいるんですよ。戦前から戦中にかけての、たとえば関東大震災の時の朝鮮人虐殺だとか南京大虐殺とか、あるいは例の人体実験だとか、とにかく我々の親の、おじいさんの世代がありとあらゆる残虐をやってきてね、今から三十八年前に一ぺんその結末が来た時に、その責任をキレイに逃げたヤツがいるんですよ。そいつがのうのうと生きているわけです。そのおかげで我々のオヤジたちもみんな責任逃げました。キャップが逃げたんだからその下に責任ないわけですよ。

谷川　その当時金属バットはなかったにしても他の物で他人の頭をかち割って、何百万人もの人間に苦痛を与え、死ぬ苦しみを与えておきながらその責任を逃がれて、しかも今ではその被害者よりも加害者の方が豊かに平和に楽しく生きているんですからね。

藤沢　それを日本の国全部が許してしまったわけですよ、だからその中で子供をまともに育てよう、というのが間違った話なんです。だから一ぺん、誰かが責任をとらんといかんわけですわ、それが今本能的に個別にとられていると。

谷川　たいへんなシッペ返しが来てるわけですね、三十八年前の。

藤沢　だから僕は**殴られる先生もオヤジも仕方ないと思いますよ。来るべきものが来たんだ**から、そこまで追い込んだのだから。追い込まれた人間ばっかり悪くゆうても仕方がない、追い込んだ方が責任取らんといけんと思うわけ。学校の先生は逃げちゃいかん、警察に頼っちゃいかん。ナイフ振り回してきたらね、刺されるのを覚悟の上でそれと闘わなきゃならん。それとも手を上げて屈服してしまうか。

谷川　無数の異議有り！が今出てるわけですよね、その中で一番大きな異議有りが隅の方へ放っておかれてしまったんです。だから僕たちが戦争のことを考える時に天皇一人が悪いんじゃない、という意義を持っている。それで完全な共犯関係になって、互いに傷舐め合って許しちゃっているわけだ。アイツが俺たちを戦争に狩り出したんだ、アイツは悪いんだってゆう感じじゃないんだよね。

話は変わるけど、森永の被害者でオトシマエをつけるんだ、てばっかり言ってたヤツがいてね、そいつはもう死んじゃったんだけど、やっぱり最後までオトシマエをつけなきゃならなかったんだね。

藤沢　そこでやさしくなっちゃいかんね、徹底的に凶暴にならなくちゃ。憎悪の方が愛より必要だっていう時もあるわけでね。愛っちゅうもんは非常に曖昧で無力なんだけど、憎悪ってのは別の意味で愛になることがあるんだよね。**たとえ天地が引っくり返ろうとも、これだけはオトシマエつけさせるんだってものはね、男も女も問わず、人間生きていく上で必要なんじゃないだろうか。**それを忘れてしまったやさしさってのはなんか非常に恐ろしい気がするね。

谷川　ところで僕らは六十年代後半の、いわゆる大学闘争にかなり触発された部分なわけですが、それだけに今の大学で、あの時出された問題というのがキチンと継承されてない、問題が問題として受け継がれてないってのが本当に残念だね。あの頃あったような大学闘争が再発してもおかしくない問題が学内にいっぱいあるのに。

藤沢　今の方がヒドイでしょう。学内はよくわからんけど、日本全体を覆っている現実なんかはね。新左翼闘争は結局あの悲劇的な浅間山荘事件でもってピリオド打ってしまったようなわけだけど、あれはぬるま湯に浸っている非常に安全な体制の中から見ているので悲劇に終っちゃうんで、そうではなく、彼らか皆んなに否定され、ののしられて、本当に野垂れ死にしてしまったけど、その中で何か言おうとした物を受け継いでやらんといかんと思うね。同じ形で受け継ぐんじゃなくて。やった事は確かにバカな事だったんだけども彼らをあそこまで追い込んだものは未だに存在していて、もっと大きくなってきているんだから。

谷川　連合赤軍にしろ東アジア反日武装戦線にしろ彼らの心ですね。行為は別だけど。

僕は思うんだけど、いわゆる大学闘争から新左翼のいろんな運動のなかで、差別の問題っていうのをキチンとやってきた、というのはこれは一つ大きなものを残したと思うね。運動の力としてはまだまだ弱いにしても、それは着実に広まって来ている。実際に障害児をかかえている親と話したりすると、その人が運動としては体制側に取り込まれたような団体にいる人であっても、ちゃんと話しが通じますよ。やっぱり価値観が変わってくれなきゃどうしようもない。自分の子供が何かの仕事をいっしょうけんめいやって、よその子供なら百できる仕事を自分の子供は五十しかできないと、こっちは百だ、こっちは五十しかできないというそれだけで比べられたらもう子供はどうしようもない、だけど人が百やるのと同じだけの、あるいはそれ以上の努力をしているとかを見てくれ、と。まず親が子供を認め、回りの人もそうなってくれなきゃいかん。気が遠くなるような話だけれど、そんな風に世の中が変ってくれなきゃ子供はどうしようもないんだってことをちゃんと分かってくれますね。

藤沢　差別の問題ちゅうのは、考えてみりゃ全ての問題の根にあるものでね。反戦の問題にしても根にあるのが差別の問題になっていくんだよね、天皇制の問題なんかもちろんそうだし、でも本腰入れて差別の問題を、そのいわゆる現象面的な差別いうんじゃなくて、生物の命に対する差別ゆうところで考えてみにゃあ、もう何も動いていかんな、と思って、とにかく今いっしょうけんめい考えているわけです。

谷川　人間が自然をコントロールするとか、人間にとっていいように変えて行くんだとかゆう考え方が幅を利かしているわけですね。それがやっと最近になって、人間も自然の一部にすぎないんだ、自然の中で生かされているんだ、だから自然を大事にしなきゃ人間も生きていけないんだとか殺してもかまわない命なんて有り得ないんだとか、そういうことがだんだん見えてきましたね。私たちの運動の中では、でもまだ全然一般的ではないですね。

藤沢　だいたい生き物の価値に順位をつけるということ自体がね、その発想が一番ひどいことをやっているわけですよ。そのひどいことがひどいとして実感されない時代であるというのは困ったもんですなぁ。

谷川　虫けらのように、という言葉があるけどね、非常に嫌な言葉ですよ。

藤沢　強がりでも何でもなしに、虫ケラも本当に自分と同じ命の重さを持っていると思わんことには何も直っていかんでしょうね、ここまで来ると。

＊

どうも最近の大学生は頭の方が、固い物を噛みこなす努力をせんようにな　たんじゃないだろうかゆう気がすごくするんですね。これは僕の専門分野の話になってくるんだけど、たとえば芝居がね、六十年代の始めに新劇に対するアングラが起こってきて、唐十郎の状況劇場とか佐藤信の黒色テント68／71とか、非常にダイナミックな才能を持った人たちがあばれ回ったんだけど、その時代に彼らを支えたのは大学生だった。若い大学生が熱狂的に支えていって、日本の芝居というものをあの十年間でガーッと引っくり返しちゃった。いわゆるアングラ以前、アングラ以後というお話で。ところがこの十年ぐらい、そういう形のアングラがまた引っくり返されて。今あるのは野田秀樹とか如月小春とか、食べ物で言えばハンバーガーでありスパゲッティーであるわけ。噛まんでもスッと飲み込めて胃にさわりが良くて消化しやすいと、そういったものになってしまったんだよね。これなんか我々芝居をやっていく上で非常に困ったことじゃなぁ、と思いながら、でもこれも一つの時代かな、と見ているけど。芝居だけじゃなしにどうなんですか、他の風俗、文化なんかは、非常に軽くて柔らかくて、舌ざわりが良くて胃にもたれんとゆうものが今の若者たちにうけているんじゃないか、という気がするんですわ。とにかく重い物、固い物はゴメンだと。

谷川　その画一化された、与えられた物にあんまり抵抗を示さないわけですね、むしろ歯ごたえなんかなけりゃいい。何かマジに物事に対することがダサイことになってしまって、斜めに構えた方がイキなんだ、という風俗があるでしょう。その中に入っているとそれがあたり前になってしまって、気が付かなくなってしまうのかもしれんけど、我々の世代から見たら、なんであれほどカッコ良く、スイスイと物事を斜めに流してしまえるのかと思うね。

藤沢　そうやって何もかも脇へ流してしまっ

て何か新しい物が生まれるんだろうかという懸念はありますね。

谷川　若者というのは時代を先取りする、嗅ぎわける能力を持っているはずなんで

理屈じゃなくて。それがかなり無くなってきたような、若者の特徴が無くなってきてるゆうかね。

藤沢　まぁ、我々から見たらモヤのようなフワーとしたものも一つの文化として嗅ぎ取って先取りしているのかもしれませんがね、その辺はようわからんですわ。

ところで最近の若い男の子はよく仲間どうしでお喋りしてるね、あれは僕は女性だけの特技かと思っていたんだけど、このごろはそうではないようで。あんなことやっているぐらいなら外に飛び出していって何かしよう、というのが僕らの感性でね、そうじゃないと辛気臭くてたまらんと。少し前に岡大の学生さんでいろいろとうちの劇団に肩入れしてくれて、宣伝とか準備とかを手伝ってくれた人がいたんだけど、僕はその人を怒らしたことがあるんだ。自分でやれ、人の世話ばっかりするな、ゆうてね。他人がやっているのを世話して喜んでるのはマスかいているようなもんで、それだったら自分でしろと。何か自分が中心になって新しいことをやっていこうとするよりは、その回りにいてお世話しようとかいうのが多いんじゃないかと感じられるんですわ。たとえば芝居を呼ぶ、フォークを呼ぶ、ロックを呼ぶ。呼び屋をやってていねいに世話をやいて、そんなこと何がおもしろくてやるのかと感心するんだけどね、あれだけ手間ヒマかけるんだったら自分で何かやればいいのにね。

谷川　それでもやっぱり自分は何かをやったつもりにはなるんでしょうね。直接はやっていないのに代償行為というかね、下受け精神が強いというのか。

藤沢　僕は岡山という所はずっと生まれ育っていろんなことやってきて、好きだし他の所をそんなに知っているわけじゃないんだけども、ただ下受け精神は非常に強いですな。ことに文化面において。見ていて腹が立つよ。たとえば芝居やってててね、東京から俳優座が来る。文学座が来るそうするとあのなんというか「役者を囲む集い」みたいなのがあるでしょう。それに岡山で芝居やってるヤツが会いに行くんですわ。同じ役者で五分と五分のはずなのにね、岡山のなんとか劇団の誰それは東京から来た劇団四季の誰それを囲む会に出たとか。

谷川　役者がファンと同じになってしまうわけですな。

藤沢　自分たちが演るにしても、完全につかこうへいのコピーをやる、野田とか北村とかガワーと出ると、たちまちそれをコピーしてしまう。これは芝居だけじゃないと思うんですけどね、文学とか美術でも同じようなもので、ああいう下受け根性というのは非常に強いですなぁ。これはちょっとヨソに恥ずかしいんじゃないかと思います。何が東京じゃ、何が大阪じゃ、岡山は岡山じゃ、と変な意味での反中央になるんじゃなく、自然なところでやって欲しいですね。

谷川　その延長で岡山にも空港を作ろう(笑)流域下水道を作ろう、なんてことになってくるわけで。文学にしても岡山は非常に衰退していましてね、僕が昔、同人誌に書いていたころ、芥川賞をこんな作品が取った、となるとたちまちその傾向をマネしはじめるヤツがいましたよ。同じような作品が続けて通ることなんてまず無いのにね。それからやっぱり中央へ出て行きたい、東京へ行きたい、今は心ならずも岡山で書いているけど、ゆうのがあってね。

藤沢　あの心ならずも岡山、てのが本当に腹立つね。ついでにその辺の話をもう少しすると、僕は岡山で三十年間芝居をやってきてるんですが。

この五年ぐらいかな、お役人主導の文化状況になってしまったんですよ。非常に不思義な話だけどね、岡山の文化を動かしているのはお役人ですよ。

そもそも役人ほど芸術や文化が分からん人種はおらんでしょう。それが今は美術にしろ演劇にしろ文学にしろ動かしているのは役人、それも文化課のナントカ主事ぐらいの人がね。その人が声をかければ岡山の文化界は全部一同に会するというわけで、それであれをやろうじゃないか、こうしようじゃないかと言うと、ハイ先生そうしましょう、と役人が先生呼ばわりされてるんです。そんな状況がここ数年で完全に固定化しましたね。何でこうなったかというと、やはり谷川さんがさっき言った心ならずも岡山でやっているけど本当は中央へ出たい、というのと密接に結びついていると思うね。体制側に認めてもらって有名になりたい、お金もらいたいということなんです。

谷川　そう言えば最近県がナントカ賞、たとえば文学選賞とかを盛んに作ってますね。あれが欲しくて目の色変えて小説書いてる、なんて人もいますよ。たしかにこの狭い地域であれは一つの権威にはなりますな。

藤沢　だいたい金にもならん事をいっしょけんめいやろうという人はほとんどいませんな。若い人でも。努力するなら金が入るか有名になるかどっちかで。なんかヒマがあったら時給四百円でもバイトに行こうと、そんなにお金が必要なわけでもないのにね。だから、他のジャンルは知りませんが芝居をやろうという人はどんどん減ってきていますね。ただ減らんところもあるんですわ。体制に順応して、お役人に気に入られているところ。お金はもらえるし宣伝はしてくれるしで、ちょっとは有名になったような気もして、そんなところはシッカリ増えていますよ。うちらなんかね、五年ぐらい前に市の芸術祭に参加してその時の助成金が四万円ぐらい、なんだこれっぽっち、て言ってたら去年は二万五千円ですよ(笑)なんで減るのかね。お役人の気に入られた団体なんかは何十万円ももらってるんですわ。だからその辺に力を持っているお役人が先生先生とおだてられる。

谷川　僕らは公害問題をやっていて、役所とぶつかることは多いんだけど、話が通じませんな。

藤沢　わざと通じないようにしているんでしょう。

谷川　あんたら反対しているんだからもう話をしてもしょうがないって、ハッキリ言いますから。行政は反対者とちゃんと話をして納得させるのが義務だと思うのに。そもそも話しをしようという気がないね。

藤沢　どこもかしこも開き直ってますね。

谷川　みなさんが大平の眠りをむさぼっている間にそうなった。

藤沢　**権力者が開き直るというのは、開き直っても大丈夫、民衆がそれを許すだろうという状況だと判断しているからなんですね。非常に恐いことですね。**

谷川　昔はね、役人にしても彼らなりの使命感みたいなものがあったんだけど、もう今じゃ頭から問答無用で反対者は切り捨てる。

藤沢　役人がエリートになってしまったんでしょうなぁ。

谷川　公僕なんて言ってもキョトンとしていますよ、全然そんな発想がないんですから。

藤沢　結局僕らはなめられていますね。文化面でも創る方がなめられている、むしろ自分からなめられる方へ行こうとする。

谷川　権力が取り込もうとするし先取りする。県が「自立と連帯」なんて言い出すんですからね。これは一昔前だったら新左翼のスローガンでしょう。みんながそれを受け入れてしまう。気付いていないってのが恐いですな。大勢の中で一人二人が叫んでいても誰も気が付かない、気が付こうとしない。

藤沢　当分事態は悪くなるでしょうね。皮膚感覚で一般の民衆がわかるようでなけりゃ。

谷川　物価が上がるとか給料が減るなんてのはコタえるけど、それ以外はね。

藤沢　選挙で選ぶ時でも判断基準は「アイツは何をどれだけ取ってこれるか」ですよ。橋とか道路とか。生活が見かけだけ向上することを望んでいたらダメですよ。

谷川　福祉、福祉と言うけれど行政にすれば全部福祉なんですよ、橋を架けるのもダムを作るのも、みんな福祉ですよ。だから問題はどんな福祉に力を入れるかということです。

障害者福祉とか老人福祉とか……

藤沢　僕もそうだったし、特に今の若い人なんかではかなり多いと思うんだけど、あえて政治にそっぽを向くというか、投票になんか行かないという人が。無関心層なんて言われるわけだけど、本当に関心のない人たちと、積極的に支持できる政党がない人たちと両方あると思うんですわ。

谷川　いわゆる政治活動に参加するということでなくても、たとえば合成洗剤を使わないといった行為がきわめて政治的な行為なのだという自覚が欲しいですね。今、問題になってきている水道水中の発ガン物質、トリハロメタンにしても、河から取水した水を塩素で消毒するとこれが発生するわけです。みんながドンドン合成洗剤を使う、ドンドン河の水を汚していく、そうすれば塩素を沢山ブチ込まなきゃならなくなる。当然トリハロメタンも沢山発生する。今は水道の水でガンになるという時代なんですよ。少数の人間が石ケンに切り換えたって追いつかない。この時代の中で生き残ろうと思えばどうしたってみんなが合成洗剤を使わないようにしていく、そんな運動が必要なんです。食品添加物の問題や環境破壊の問題、みんながまとめて殺されて行く状況の中でなんとかしようとして行動することには、すべて政治的な意味があると思うんですよ。

藤沢　僕らがやっている芝居にしても政治的な意味があるんですから。ただそこで政治を意識した時になかなかかわりようがないわけですよ。既成の政党はイヤだし。だから谷川さんたちのやってきた草の根的な市民運動というのは非常に重要ですね。政治を自分たちの側に取り返そうとすることなんかも。

谷川　僕は今度の岡山市議選に立候補する予定なんですが、今まで草の根的な運動を広げるなかで行政は常に僕らの前に壁として立ちはだかってきた。これだけ危機的な状況にありながら政治は人々のために行われていない。これは歴然たる事実です。その状況に取り組むことの一つとして、みんなで市議選をがんばろうということになったのですが、市議選を通じて僕たちは、みんなが置かれている危機を訴えていきたい、僕たちと一緒に行動してくれることを訴えていきたいですね。瀬戸大橋や新岡山空港、児島湖流域下水道や苫田ダムと、ムダな計画や有害な計画が公共事業の名のもとに住民の反対を無視して強引に進められている。瀬戸大橋時代とか岡山市は中四国の中核都市になるんだとかの幻想が振り撒かれていることのなかに、人間破壊が進行している実体や、その元兇を見据えることにおいて、僕たちは信頼するに足る政党を持たない、残念なことですね。なんとかみんなの力で市政に風穴をあけてやりたいです。